

呼びかけと倫理

伊吹浩一

アルチュセールの「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」で示されたinterpellationという語は「尋問」を意味するが、この論文がわが国にはじめて紹介されたとき、翻訳者の西川長夫が「呼びかけ」と訳して以来、もはや別の言葉を当てることが不可能なほどこの訳語は現在のわが国の理論的地平において定着している。もちろん、この訳語を当てたことはまったく適切であったわけであり、これによってアルチュセールのイデオロギー論はいつその魅力を放つことになり、多くの読者の思考を触発することになった。

しかし、interpellation という語がこの論文の中で使用されるさい、それが「尋問」を意味することからも推察できるが、決して明さを放つ語ではなく、いわば「わるい」イメージがともなう。それを端的に表わしている例が、街頭で警官に呼びかけられる場面である。街頭で警官に呼びかけられ、振り向くことによってその個人は国家の主体＝臣民sujetになる。何気ない日常的な振る舞いを介して個人が国家に回収され、自由が奪われるというあまり喜ばしくない場面でこの語が使用されているのだ。著者であるアルチュセール自身は言うまでもなく、読者の多くは変革の何らかの契機をつかもうとこのテキストを開くであろうが、そういう者たちには「よい」印象を喚起させることがないような場面で、この語が使用されている。

さらには、人類の歴史を貫いて見られる現象として、人間の共同体が成立し存続していくところには往々にして宗教的なものが存在する。それなくしては人間存在そのものが存続不可能であるかのごとく宗教は人類の歴史に寄り添って現在も（いや現在こそ宗教的な時代なのかもしれない！）存続している。そうであるからこそ、様々な時代・地域で時の権力者たちは宗教を利用し、人々を支配してきたのだ。世界のかなりの部分を覆い尽くしたキリスト教はその典型であるが、この宗教が人々を拘束していくグロテスクな場面を抽象的に描写するさいに、このinterpellationという語が使用される。支配者たちが放つイデオロギーの中心に〈主体〉があり、人々はこの〈主体〉が投げかける「呼びかけ＝尋問」に応えることによって宗教的主体となり、体制に吸収されていくのだ。

アルチュセールは疑問に思った。なぜ、資本主義体制はかくも強靱なのか。人々は日々搾取・抑圧されているにもかかわらず、なぜ現状に甘んじてしまうのか。そのとき、マルクス主義の領域では等閑に付されていたイデオロギーに光があてられる。あるいは、これまたマルクス主義の領域では曖昧な輪郭しか示していなかった国家が、イデオロギーとの関わりの中、鮮明さを増幅させる。アルチュセールは、人々が体制のイデオロギーや国家に吸収されていく様子を、資本主義的主体がつけられていく様を見事に描き出した。そう、あまりにも見事に描き出したのだ。そうであるがゆえに、この論文は同時に、われわれはもはや資本主義体制の外には逃れられないという諦観に寄与することになった。まったくの出口なし。そこからアルチュセールのこの論文に対する批判が出てくる。アルチュセールのイデオロギー論はあまりにもスタ

ティクで、変革の兆しをつかめないではないか、と。

しかし、立場 position を変えてみれば、体制側の者たちにとって、警官や国家イデオロギーからの呼びかけに応えることは「よい」ことであり、この呼びかけに応える者を一人でも多く産出することに努めることだろう。例えば、昨今問題となった教育「改革」などその典型であり、「学力低下」「学級崩壊」「いじめ」などの問題に解決をもたらすために、「愛国心」を導入するというものである。政府は「正常性」から逸脱してしまった子どもたちに対し、「愛国心」というそのままズバリの国家イデオロギーを注入することによって、規範意識を植えつけ、矯正しようとしているのだ。

しかしここで問題なのは、思想・信条の自由が侵される、これでは戦前の軍国主義教育と何ら変わらない反動的な政策であると批判する以前に、「愛国心」の注入で果たして「いじめ」や「学級崩壊」が改善できるのかといえ、おそらくほとんど無理、ということを経験者が気づいてしまっていることである。「いじめ」をなくそうとするならば、資本主義体制そのものの抜本的な変革が必要となる。なぜなら、資本主義そのものが「いじめ」の構造を宿したものであり、子どもたちは大人たちから教わる資本主義的振舞を素直に表出しているにすぎないからである。「いじめ」の根源を放置しながら、それを「愛国心」でカバーしようとしても土台無理な話なのである。

だが、こうした茶番において注目しておかなければならないことがある。アルチュセールが指摘するように、イデオロギーは観念的な存在でありつつも、しかし、観念ではなく、身体を媒介にしてその人に宿るということである。愛する対象である国家そのものを想像することすらできないにもかかわらず、国を愛せと言われても難しいと考える国民が大多数をしめる中、この政府の愚策をシニカルに嘲笑することは容易いが、しかしイデオロギーは観念（意識）を媒介としない。おそらく現代でも愛国心が国民に植えつけられるときは、戦中のように何らかの身体的反復運動によって行なわれることだろう。本当に愛国心を抱いているかどうかなどはどうでもよいのだ。愛国心を抱いていなくても、身体的振舞を通して、無意識裡に、われわれは立派な愛国者になるであろう。イデオロギーの内容そのものは無意味でよいのだ。

「私の身体」という私にとって最も近いものを土台にして国家イデオロギーという公的なものが展開される。身体を舞台にして「公／私」のせめぎ合いが繰り広げられるのだ。西川長夫が昨今盛んになされている公共性をめぐる議論に対し、アルチュセールのイデオロギー論は一つの示唆を与えてくれるのではないかと指摘しているが（『〈新〉植民地主義論』）、まさにその通りである。人間はイデオロギー的存在である。つまりイデオロギーなくしては人間は存在できないのだ。また、イデオロギーは複数の人間たちに共有されないかぎり存在できない。それゆえ、人間は自ずと「公的な」部面を持たざるをえない。しかし、あらゆるイデオロギーが「公的な」姿をして現れるとはかぎらない。スポーツや娯楽などの日常的なありふれた個人的な領域に忍び込んでいるのだ。まさに「私的な」領域を舞台にして展開されるのがイデオロギーの特質であり、そこにおいてはどこまでが私的でどこまでが公的であるのかが判然としない。しかもイデオロギーは「私の身体」を媒介にしてその人に宿る。やはり、出口なしなのか。（あるいは、そのとき、ネグリの提唱する〈共〉という概念が何らかの示唆を与えてくれるのかもしれない。）

言うまでもなくナショナリズム的な観念、つまりナルシシクな機制を持つ観念（イデオロギーはナルシシク＝鏡像的なものであるとアルチュセールは指摘している）は、排外的な性質を帯びる。愛国心のような無意味であるイデオロギーが主張され、守られようとするとき、それがまさに合理的な根拠を持たないからこそ、暴力的な排除は合理性を欠いた底なしのものとなろう。歴史が示す通りである。教育に愛国心を導入することは「いじめ」問題を改善するどころか、非国民排斥というさらなる「いじめ」をつくり出すことになるのではないか。政府の愚策はいっそうの悲惨を産み出すことになるのかもしれない。

ところで、反体制側に目を移してみると、反体制思想も批判精神もイデオロギーである。かつてのマルクス主義（とりわけスターリン主義）ならばマルクス主義は科学であり、イデオロギーではないのだと言っただろうが、アルチュセールは、イデオロギーが人々に注入される場であるイデオロギー装置の中に党や労働組合も数え入れ、このレヴェルではマルクス主義や反体制思想に特権的な位置を与えていない。反体制思想もイデオロギー的「呼びかけ」に応えることによって人に宿るのである。支配者たちも彼らを批判する者たちもイデオロギーなくしては存在できない。

「呼びかけ」の議論は「良心」や「道徳意識」の問題と密接に絡み合う。言うまでもなく道徳は時と場、立場によって変わる。アルチュセールの示した「呼びかけ」の議論、つまり「イデオロギー一般の構造」は特定の具体的な立場のイデオロギーを説明するものではない。「道徳的良心」も時と場、立場が変われば様々だろう。「イデオロギー一般の構造」はこの「道徳的良心」が形成される構造を説明するものなのだ。いわば良心の構造の「形式」を示している。「形式」であるがゆえに、それは「善」にも「悪」にもなりうる。「呼びかけ」の議論、つまり「イデオロギー一般の構造」の議論は善悪の判断の外にある、まさに善悪の彼岸のことがらを問題しているのだ。とはいえ、具体的な内容を抜きにした善悪などありえない。そこに善悪という価値判断が存在するとき、何らかの立場から見られた具体的な内容を伴った善悪が存在する。

体制を批判する者たちは、自己の道徳的立場に従い、搾取・抑圧・差別される人々のために現状の理不尽さを告発し、体制打倒を唱えるだろう。しかし問題なのは、それを唱える者たちの多くは、往々にして搾取・抑圧・差別をつくりだしている者たちの側の人間であるということだ。そうであるにもかかわらず、ぬけぬけと「正義」を語る。かく言う私もそのうちの一人である。体制批判をする者の多くは、自分自身は搾取・抑圧・差別される当事者ではないにもかかわらず、まるで自分自身がその当事者であるかのように語る、あるいは代弁する。欺瞞である。確かに欺瞞である。しかし、彼・彼女らは自らの良心に従いそれを行なっているのであり、「悪気」はない。それを行なうことは「善」なのだ。しかし、この「善」は、当事者の目からは「偽善」に映るかもしれない。とはいえ、この理不尽な状況を改善するためには、当事者だけでは現実的に難しい。やはり、当事者を支援し、代弁する者たちの存在は欠かせない。

*

道徳と倫理は異なる。道徳は、いわば善悪に関してその時代ごとに制度化されたものである。したがって時代が変わればその内容も変わるだろう。だが、うつろいゆくものであっても道徳

は人間の共同体が存在するかぎり必ず存在する。ただ存在するだけでなく、日々の生活の根幹となり、一人一人の行為を拘束する。

それに対して倫理は道徳とは異なり、その外にあるものだ。いわば、道徳を創り出す“力の発生の場”のようなものである。おそらくアルチュセールの示した「呼びかけ」の議論は、この倫理の次元にあるものであろう。

自己の良心に従い、善かれと思ひ為したことが「悪」となる。そんなとき人は当然迷う。それに対して固定された「善」を信奉する「独善的な」人間は、確かに迷いはなかりうが、危険である。大量殺人も自爆テロも同志殺しも「正義」の名の下ひるまず遂行することだろう。なぜなら、それが「正しい」からだ。「良心」からの「呼びかけ」は「善」にも「悪」にもなりうる。愛国心を抱き国家に忠誠を誓うことも一つの道徳的な立場である。それに対して異議を唱えるのもまた一つの道徳的な立場である。両者に共通するのは「正しさ」の答えがあらかじめ決まっているところである。たしかに人間である以上何らかの道徳的な立場＝イデオロギーに与せざるをえない。しかし、そうでありつつも、そこからはみ出てしまい、迷う者がいる。固定された「正しさ」の答えを持ちえないから、迷うのである。現実と理念との間でたえず揺らぎ、苦悩する者、そうした者は、おそらく、倫理的な場にあわせているのではないか。おそらく、そうした者は、既成の「善」を何の疑いも抱くことなく振りかざしそこに安住してしまっている者よりも、はるかに倫理的な人間であるのではないか。そこに、かすかではあれ、一つの可能性を見出すことができると思われる。